

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Bulgaria : an ethnological travelogue

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 九祚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004612

ブルガリア民族学の旅

加藤 九 祚*

1975年夏、私は、ソ連と東欧諸国から民族学的資料を入手する必要があるのかんがみ、まずブルガリア人民共和国の文化省あてに国立民族学博物館長名で協力かたを依頼する手紙を出した。なぜブルガリアからはじめたかという、たまたま私の友人のひとりが対ブルガリア貿易に関係していたからである。

まもなく、ブルガリアの対外文化協会から返事がきた。1976年6月に私が日本側の費用でブルガリアを訪れ、ブルガリア各地の民族学博物館を見学し、欲しい品物を具体的に指定してほしい。そうすればブルガリアの当局としては、できるだけ希望にそうように資料をさがし、適当な値段で日本側にゆずりましょう、という意味のことが書かれてあった。つまり商品の下見にいらっしやい、というものであった。

ところが1976年初春から10カ月間、私は日本学術振興会の海外派遣研究員としてモスクワ大学に出張することになった。そこで私は、大学当局の許可を得て、モスクワから研修旅行という名目でブルガ

リアに1976年5月26日から約3週間出かけることにした。以下はそのときの印象と調査をもとにつづったものである。むろん、私にとってはじめての東欧（ソ連をのぞく）の旅であった。

〔自然・住民〕

ブルガリア人民共和国はバルカン半島の北東部を占め、北と北東はルーマニア、西はユーゴスラビア、南はギリシア、南東はトルコと国境を接し、東部は黒海に面している。面積は11万0927平方13キロで、日本の3分の1たらずであるが、人口は13分の1にみたない。ブルガリアは地理的に見て、東ヨーロッパ平原と地中海の中間をなし、地形、気候、水系、土壌、植物などに移行地帯的特徴がよくあらわれている。

ブルガリアの自然は変化に富んでいる。国土の31.5%は海拔200m以下の平原、35.5%は丘陵性の地域(海拔200-500m)、20.5%は500-1,000mの高地、12.5%は山岳である。ドナウ川の南には幅20-120kmの丘陵性のドナウ平原があり、ヤントラ川によって東(わりあい高い)西の2部分に分けられている。ドナウ平原の南にはスタラ・プラニナ(バルカン山地)が広がっている。この山地は、南側が岩石質の急斜面をなし、北側は平行に走る幾条もの山脈(あまり高くない)からなっている。

ブルガリアの中央部はバルカン山地とリラ・ロドプ山脈の中間をなし、そのなかにウィトシャ、スレドナ・ゴラなどの山地やトラキア低地が含まれている。ブルガリアの南部はリラ山(高さ2,925m)、

* 国立民族学博物館第1研究部

ピリン山、ロドプ山を頂点とするリラ・ロドプ山脈によって占められている。

ブルガリアの河川はすべてエーゲ海と黒海に流入している。ドナウ川はこの国の水系の軸をなし、スタラ・プラニナ山地からの多くの川とリラ山を源流とするイスキル川がこれに流れこんでいる。エーゲ海へはマリツァ川、ストルマ川、メスタ川などが流入している。

ブルガリアには農業に適する地域が少なくない。ドナウ平原の土壌は黒土 Чернозем である。リラ・ロドプ山地はタバコの栽培に適している。植物の多くは広葉樹(カシ、ボダイジュ、ブナなど)、針葉樹(モミ、マツなど)である。森林は国土の32.4%を占めているが、用材となるのはその半分以下とされている。動物には東ヨーロッパ全域に共通のものが多いが、中にはヘビのように地中海系統に属するものも見られる。

地下資源はこれまでわりあい貧しいとされていたが、最近の地質探査によって新たに鉄鉱、石油、褐炭などの埋蔵地が発見された。自己資源による重工業、化学工業への展望もひらけつつある。

ブルガリアの人口は868万(1974年現在)であるが、その約89%はブルガリア人である。ブルガリア人はブルガリア本国のほかにはソ連(ウクライナ共和国、モルダビア共和国)、ユーゴスラビアなどにも居住している。ブルガリアにはこのほか5000人以上のガガウズ人が住んでいる。彼らはトルコ語を母語としているが、キリスト教を信じ、生活習慣もまわりのブルガリア人とほとんどかわらない。近年、ガガウズ人とブルガリア人との融合が急速にすすんでいる。ブルガリア東部にはトルコ人だけの、あるいはトルコ

人とブルガリア人との混合した村が見られる。トルコ人はこの国の総人口の約8%を占めている。これはブルガリアがトルコに支配された時期に移住したトルコ人と当時強制的にイスラムに改宗させられたブルガリア人の後裔である。ジプシーはブルガリアの各地に見られるが、その数は約20万といわれる。

〔民族史のあらまし〕

ブルガリアの地に人間が住みついたのは旧石器時代の昔であるが、紀元前8-6世紀の住民は、ギリシア人の記述によれば、トラキア人とよばれた。両者の接触は、トラキア西岸にギリシア人の植民地ができてからはさらに緊密となった。トドロフ Nikolai Todorov 教授によると、ディオニソス信仰やオルフォイス伝説その他多くがトラキア人からギリシア神話の中に入った。他面、ギリシア美術はトラキア美術に強力な影響をあたえた。たとえばカザンリク球形墓の天井画はその代表的例である。その他、いわゆるトラキア美術として、近年世界の耳目を集めている黄金遺物にもギリシア文化の影響を見のがすことができない。前5世紀、それまで分散していたトラキア人の一部は部族連合を成立させ、オドリス族を盟主とする奴隷制国家をつくりあげた。

トラキア人の主な生業は農耕であった。またブドウを栽培し、馬、牛、羊などを飼養した。都市らしいところでは土器など手工業も行なわれた。

トラキアの美術品の中にはスキタイの動物意匠によく似たデザインのものも少なくない。ロシアの学者ロストフツェフはかつて、それがスキタイ起源であると主張した。しかし他の学者は、トラキア

美術の動物意匠とスキタイ美術のそれとは相互に無関係に発達した、両者が類似しているのは、いずれもアケメネス朝以前および後のイランに起源しているからであるとのべている。しかし最近では、スキタイとトラキアとが隣接関係にあり、両者の直接的な相互影響によるものも少なくないことが指摘されている。いずれにしても日本ではトラキア美術のことはほとんど知られておらず、ましてスキタイとトラキアとの関係についての論考は皆無に近いと考えられる。今後の研究が期待される。

前4-2世紀、トラキアはアレクサンダー大王に征服され、今のプロウディフの地にギリシア都市フィリップポルが建設された。その後ローマ帝国の支配(1-4世紀)も著しい痕跡を残した。セルディク(現在のソフィア)など多くの都市がつくられ、軍事目的に由来する道路網も整備されたが、その一部は近世まで重要な商業路としての意義を保っていた。例えばビザンツ(コンスタンチノプル)からアドリアノプル、フィリップポル、セルディク、ナイス(ニシュ)、シンギドゥン(ベオグラド)、ウィンドボン(ウィーン)にいたる道である。都市や要塞はトラキア人がローマ化されるうえでの中心地となった。この時代、バスタルン(2世紀)、ゴート(4世紀)、フン(5世紀)などの侵入があり、ローマ人の一部は残って原住民と混じり合った。

5-6世紀、バルカン半島にスラブ族が移住した。ブルガリアの地に入ったのは、主としてそれまで現在のワラキアおよびハンガリーに住んでいた諸部族であった。トラキア人は大部分その住地にとどまり、しだいに外来者と融合したが、

ローマ化された住民の一部は半島南西部の山地に去った。これは主として牧畜民であった。

バルカン半島に定着したスラブ族は農耕民で、家族共同体がよく発達していたと考えられている。彼らは古典古代の文化を継承し、農耕技術を発展させ、しだいにいわゆる階級社会に移行し、7世紀には部族連合が形成されはじめた。

この頃、カフカス北部のステップから首長アスパルフに率いられたチュルク族遊牧民がブルガリアの地に進入した。おりしもコンスタンチヌス4世のビザンツ軍がブルガリアの地に南下したため、土着のスラブ人と新来のチュルク族は協力してこれを撃退し、681年にプリスカを首都とする新国家が成立した(プリスカは現在ブルガリアの代表的ブランディにその名をとどめている)。この国家の主導権は遊牧民の手ににぎられ、クルム王の治世には近隣を征服し、811年ビザンツ皇帝ニケフォルス1世を戦死させた。このチュルク系遊牧民はプロト・ブルガールとよばれ、ヴォルガ川流域に入ってヴォルガ・ブルガール国家をつくった部族と同じ系統であったとされている。私の知合いであるソフィアの民族学者プンテフは、現代のブルガリアとヴォルガ川流域に住むチュワシ人、ウドムルト人などの伝統的装飾文様は、驚くほど似ていると語っていた。彼はこのテーマで現在論文を書いている。

クルム王の時代、ブルガリアは政治的、文化的に興隆し、バルカン半島最強として勢威をふるった。つづいてボリス王(853-889)は865年キリスト教を国教と定め、5年後にはコンスタンチノプルの宗教会議でブルガリア独自の大主教区が



写真1 バルカン半島最古といわれるソフィアの聖ゲオルギ教会

認められた。これより前の855年、ソルン生れの僧キリルとメトディーはギリシア文字に基づいてキリル文字を発明し(今のロシア文字の母体)、教会関係の書物をギリシア語からスラブ語に翻訳した。彼らの事業はキリスト教文明の普及に、またスラブ族の開明化にはかり知れない役割を果たした。

9世紀末に即位したシメオン王の治世(893-927)には、ブルガリアの領土はエーゲ海岸およびアドリア海岸に達した。しかし、シメオンの死後内紛が起り、1018-1086年の間ビザンツに支配される運命となった。この時期、南ロシアのステップからペチェネグ、ポロヴェツらの遊牧民がブルガリア北東部およびソフィア平原に入りこんだ。ブルガリアの民族形成におけるこれら部族の役割は今のところ明らかにされていない。

1085-86年、ティルノボの領主アセンとペトルの兄弟に率いられた独立運動が成功して、ブルガリアの第2国家期を迎えた。13-14世紀は政治・文化の面で繁

栄し、ティルノボの文学・美術・工芸はロシア、セルビアなど近隣のスラブ諸民族に大きな影響をあたえた。しかし170年にわたるビザンツ帝国の支配の結果、ブルガリアの民族文化におけるビザンツ文化の刻印は無視できないものとなった。

14世紀中頃、ブルガリアは3つの独立した王国に分裂した。これはオスマン・トルコの征服を容易にし、1396年全土がその支配下に入った。とくに都市はトルコによる植民地化の拠点となり、衣服、家具調度、建築などでトルコ文化の影響を田舎よりも強く受けることになった。

オスマン帝国の中心部に近いロドプ山地の住民の一部は、トルコ人によって強制的にスィラム教に改宗させられたが、面白いことに、このイスラム教徒ブルガリア人の方がキリスト教徒ブルガリア人よりも、古代スラブ文化の特徴をよく伝えていると言われる。ロドプ山地には一部のトルコ系遊牧民も移住した。また18-19世紀、国の北部および北東部にタール人とチェルケス人が移住したが、

1877-78年のブルガリア独立戦争で再び退去した。トルコは、イスラム教徒をひき入れることによって、自分たちの支配を安泰にしようと試みたのである。19世紀前半までのブルガリアの経済生活におけるギリシア人の重要な役割も無視できない。18世紀後半にはじまる「ブルガリアのルネッサンス」は、ギリシア人からの宗教的、文化的、経済的独立とトルコ人からの民族的独立という2つの性格をもっていた。それほどギリシアの影響力が強かったのである。

オスマン・トルコの支配は500年の長きにおよんだ。そのためバルカンにおけるブルガリア人の存在は、少数の例外をのぞいて、世界のほとんどの人々から忘れ去られていた。ブルガリア人自身も生活におわれて長い眠りについていて。彼らが民族的自覚に目ざめ、その存在を主張しはじめたのは18世紀後半のことである。これが「ブルガリアのルネッサンス」である。19世紀後半のロシアの学者ウォドヴォゾフ E.H. Водовозов によると、ブルガリア人の民族意識が長い眠りから目ざめはじめたのは、1762年アトン山の修道僧パイシー Пайсни Хилендарскиがブルガリア語で書いた『スラブ・ブルガリアの歴史』 *История Славяноболгарская* (1762) に刺戟されたためと言われる。本書はまたブルガリア民族学に関する最初の著作でもあった。「ブルガリア人よ、自らの民族と言語を知れ」「Болгарине, знай свой род и язык!」というパイシーの呼びかけは、今ではブルガリアの小学生にまでよく知られている。ワカレルスキ Христо Вакарелски の大著『ブルガリア民族学』(1974年ソフィア)も、パイシーのこの言葉から書き出

されている。パイシーの著作の出現こそは、「ブルガリア・ルネッサンス」の開始を意味しており、約100年後の1876年4月蜂起をもって終るとされている。この間幾世代にもわたって、ブルガリア人の多くの若者たちはガイドゥキ Гайдуки とよばれる対トルコ抵抗運動の組織に加わって彼らの青春を燃焼させた。ガイドゥキは人里はなれた山中に出没し、ブルガリア人を不当に圧迫したトルコ人に必ず報復したと言われる。

1876年4月の蜂起はカラヴェロフ Любен Каравелов, レフスキ Васил Левски, ボテフ Христо Ботев ら多くの革命家によって準備されたが、トルコの正規軍によって徹底的に弾圧された。フィリップポル管区だけでも65の村が焼かれ、11万人が殺されたと伝えられている。

1877年4月、ロシアはスラブ族同胞の救援を旗じるしにトルコに宣戦し、軍隊をブルガリアに派遣した。ブルガリア人は義勇軍を編成してロシア軍とともにトルコ軍を撃破した。この戦争中にブルガリア人が受けた惨苦も言語に絶した。トルコはついに1878年3月3日のサン・ステファノ条約でブルガリアの独立を認めざるを得なかった。しかしその領土の問題でヨーロッパ列強が異議をとなえ、1878年6月のベルリン会議で変更が加えられた。

独立後のブルガリアでは、しだいにドイツとオーストリー・ハンガリー帝国の経済的影響が強まった。独立戦争でロシアの援助をうけ、国内各地にロシアに対する感謝の記念物が建てられたりしたが、独立後のブルガリアには、逆にドイツへの政治的、経済的傾斜が見られ、むしろ

反ロシアに走ったことは歴史の皮肉というべきである。ソフィア市内にも、ロシアの援助を記念する建造物がいくつも今に残っている。

1812年、フェルジナンド王のときバルカン戦争が起こり、ついで第1次世界大戦ではドイツに加わって完敗し、領土の一部を失った。一方、国内ではマルクス主義的政治活動も台頭しはじめた。

戦後、スタムボリスキー内閣による経済改革が行なわれるが、大ブルジョアと軍部とが結びついて、1923年6月9日クーデターが起され、スタボリスキーら主要メンバーは殺された。多くの進歩的知識人や共産主義者も銃殺された。経済は疲弊し、失業者が町にあふれた。その年の9月、弾圧政治に反対する武装蜂起が勃発した。ディミトロフ **Георгий Димитров** やコラロフ **Васил Коларов** らの共産主義者もこれに加わった。しかし蜂起は結局失敗し、ディミトロフらはソ連に亡命するにいたった。

1925年にはソフィア寺院爆破事件をめぐる大検挙が行なわれ、民主主義者にたいするファッショの弾圧がつけられた。

第2次世界大戦で、ブルガリアは再びドイツ側についた。一方、1942年ディミトロフの指導によってブルガリア共産党を中心とする祖国戦線が結成され、パルチザン活動が活発となった。1944年9月8日、トルブヒン元師指揮下のソ連ウクライナ戦線軍がブルガリア領内に入ったのを機会に、祖国戦線によって政府がくつがえされ、その結果、戦後史の幕が切られて落されるにいたった。

独立以後のブルガリアの歩みをながめるとき、いくつかの大戦争がつづき、戦争のないときには弾圧とそれにたいする

抵抗が繰返され、民衆の生活はきわめて不安定であったことがうかがわれる。500年にわたるトルコの支配とそれにつづく困難な独立運動を加えると、第2次世界大戦後の数十年間は、史上で最も平和な時期と言えるかも知れない。また、一方では、古来ギリシア、ローマ、ビザンツ、トルコ、ロシア、ドイツなど周囲の強国の勢力に悩まされながらも、その民族の特徴を強固に保ち得たことに驚かされる。ブルガリアはこの意味で、きわめて魅力に富む国である。しかしブルガリアの民族文化とその周辺文化との相互影響の問題は、まだほとんど未開拓のまま残されており、外国の研究者の参加できる余地も少なくないと思われる。

〔ブルガリアの民族文化を求めて〕

1976年5月26日 晴 0時45分、モスクワのキエフ駅発ソフィア行列車に乗る。新緑映えるウクライナ平原を走り、翌日の夜半、午前1時頃から約3時間かかってソ連とルーマニアの国境を通過した。この3時間のあいだに車輪を狭軌につけかえたり、税関検査が行なわれたりしたが、両国の役人が私たちの個室を訪れること、実に十数回におよんだ。ソ連領内の停車駅ではライラックやチューリップの花束、直径2cmほどの赤大根の束などが売られていた。私もライラックの大束を1ルーブリ(400円)で買った。

翌27日は終日ルーマニア中央部の大平原を南下した。ムギ、トウモロコシの畑が果てしなくつづき、集落の近くではヒツジの群も多かった。沿線の白いアカシアが印象的で、線路のそばで遊んでいる田舎の子どもたちの裸足が私自身の少年時代を思い出させた。

ドナウ川の鉄橋を渡るとブルガリア領内のルセ市である（図1参照）。ここではルーマニアに比べて税関検査も簡単であり、ビザの代りに1日10ドルの割でドルをブルガリア貨幣に交換することだけが要求された。とりあえず10日分として100ドルを95レフ83ストチンキに交換してもらった。

2日目も暮れて、汽車は深い溪谷沿いの坂道をあえぐように登った。兩岸には地層を露出させた断崖がつらなり、赤い屋根の集落が樹林の中に点在していた。

21時17分ソフィア駅着。外はすでに真っ暗になっており、旅客も少なかった。雨が降ったり止んだりして、落ち着かない天気であった。出迎えの人もないので、とにかくタクシーを拾い、これというあてもなしにホテル・ブルガリアを目指した。受付ではロシア語がよく通じ、部屋がないということで、近くのホテル・ソフィアをすすめられた。

ホテル・ソフィアの設備は市内で最高水準ということだったが、ツインで1泊45レフ（約1万4,000円）。

6月28日、ブルガリア対外文化協会を訪れ、キショフ **Кисъов** 氏らに面会、旅行の趣旨をのべ助力を依頼した。最初の会談にはキショフ氏のほかコストワ **Сава Костова** さん、科学アカデミー付属民族学博物館長プンテフ **Пенко Пунтев** も同席し、私のブルガリア国内旅行のために、ロシア語の堪能な民族学者シプチャノワ **Недялка Шипчанова** さんを案内としてつけてくれることになった。私のブルガリア旅行が多少とも成果を得たとすれば、まずシプチャノワ（愛称ネディ）さんの献身的な助力のおかげである。

午後、対外文化協会のお世話でホテル・ソ

フィアからホテル・セルディク（ソフィアはローマ時代セルディクと呼ばれた）に移ることになった。環境や設備は前者より劣るが、1日12レフでたいへん安かった。ただし外国人は、公式機関の口ききなしではここに宿泊できない。

夕方、ブルガリア・ホテル1階のビアホールでプンテフ館長とブドウ酒をのんだ。入口でひとり2レフの食券を買ったが、これは一種の前払いで、入場者は最低2レフ飲食するという約束を意味していた。

プンテフはロシア語が上手であった。そして他人の前でも私とロシア語で話すことをいやがらなかった。一般に、その後訪れた東ドイツに比べて、ブルガリアでのロシア語は解放的なように見うけられた。東ドイツではロシア語を知っていても、人前で話すことをさける傾向が目立ったのであるが——。プンテフは、今年7年制を修了する彼のひとり娘が秀才であって、ドイツ語専門学校に入学できたことをたいへん喜んでいて。

5月30日 晴 このところ毎日のように、朝は晴れ、午後から夕方にかけて雨になっている、朝9時、バスでソフィアから120キロのリラ山中にあるリラ修道院に向かう。修道院は10世紀、イワン・リルスキという聖者の住地付近に創建され、焼失と再建をくりかえし、現在の形になったのは19世紀前半のことであるという。広い構内で最古の建物はフレリの塔 **Хрельева Башня** とよばれる方形の石造建築物である（1335年建）。これは外敵が来襲したとき修道僧たちが避難するためであったと言われる。

リラ修道院はブルガリアの建築・美術の宝庫である。外側からは小さな窓のつ

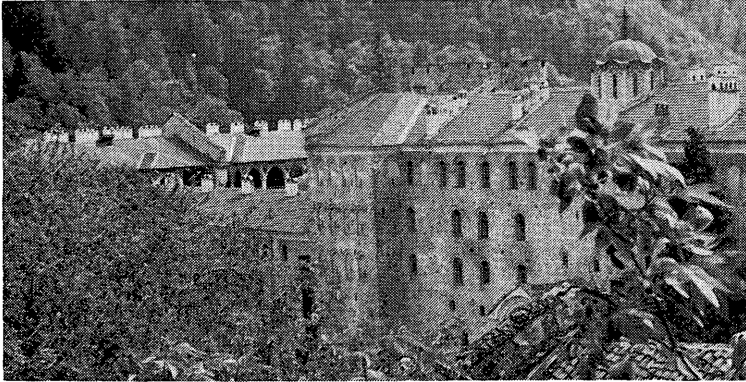


写真2 リラ修道院の外観

らなる要塞のようなさびしい建物であるが、いったん門を入ると、色彩豊かな曲線の建物が多く、修道院とは思えないほど明るい感じがする。聖ボゴロジツァ寺院は黄色、うす赤、青などを用い、屋根

は波形で、円柱のある回廊の天井や壁面もすべて聖画でおおわれている。4階建の僧院の内庭に面する側にはアーチ型の白い列柱がならび、それに黒のまだら文様がほどこされている。全体として繊細と壮大の両要素をそなえている。

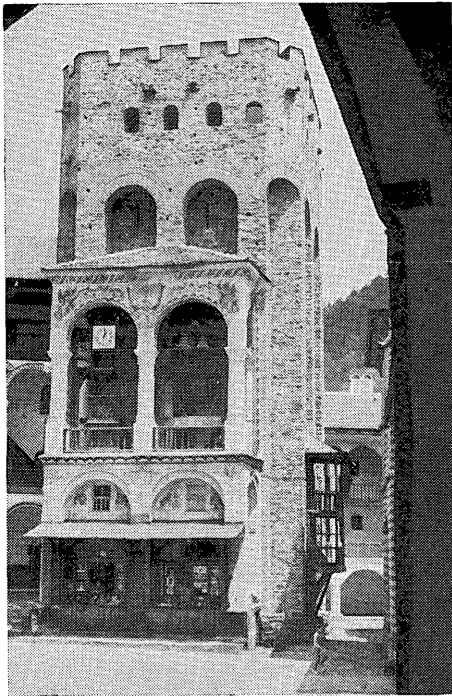


写真3 リラ修道院内のフレリの塔

かつてここには、多いときには200人もの修道僧が住んでいた。部屋数は全部で330に達するが、修道僧にはそれぞれ個室があたえられたから、残りの130室は原則として来客用であった。かつてブルガリア各地からさまざまな寄進物をもった参詣者が絶えず、それらの人々に食事を用意するための巨大な釜をならべた炊事場もあった。現在修道院の一部はかつての寄進物を展示する博物館・宝物館になっている。

ウォドウォゾフの著作によると、1881年当時、リラ修道院には120人の修道僧がいた。そして修道院内の礼拝堂の祭壇には無数の頭蓋骨がつまれてあったという。これは死者の遺族が金銭や現物を寄進して保管を依頼したものであった。またむかしは、リラ修道院でも、他の修道院の場合と同じように、遺骸の状態によ

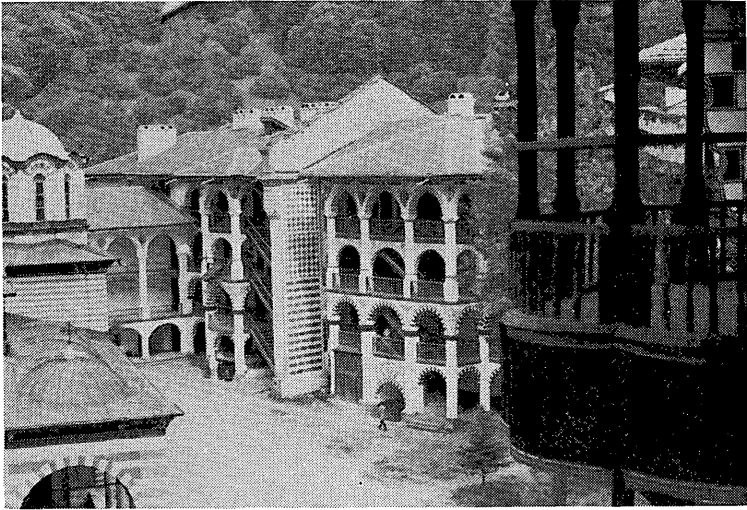


写真4　リラ修道院の中庭の一部

って死者の霊が天国あるいは地獄のいずれにおもむいたかを知るために、墓を掘り返すことが行なわれたという。

ブルガリアの一部の修道院では、死亡した修道僧の頭蓋骨は箱に納められ、特別の部屋に安置された。箱にはそれぞれ名前と十字架がつけられ、まれに近親者がやってきて頭蓋骨にろうそくをたて冥福を祈った。

修道僧たちは分業で修道院での生活に必要な生産労働に従事した。裁縫、製靴、大工などはもちろん、羊飼いの仕事まであった。修道僧たちの多くはすぐれた猟師でもあり、ブルガリアの山地に多い鳥獣を獲って食糧とした。僧たちの個室の壁に、彼らの仕止めたオオカミなどの毛皮のかかっていることも珍しくなかった。

なにかのお祭りのときには、多くの住民が修道院に集まり、あたりにさまざまな物を売る市が立った。人々は修道院の提供するご馳走を食べ、踊ったり、祈ったりした。かつてバルカン山地の斜面や

峡谷には、「徒歩で3-4時間の距離に2、3の修道院があった」とつたえられている。

リラ修道院の日没は早かった。修道院が白雪の山のふもと、深い峡谷にあるため、5月末というのに、夕方になると急に冷えこんだ。バスでソフィアに帰り着いたときには、すでに街のネオンが鮮やかであった。

〔宗教・儀礼〕

ブルガリアの宗教はギリシア正教であるが、プロウディフ市付近およびドナウ川中流域にはカトリック教徒も混じっている。ほかに一部のブルガリア人は今でもイスラム教徒である。

ブルガリア人はわりあい宗教に無関心であるといわれる。これは一つには、トルコの支配下で教会の権力が弱く、しかもそれがギリシア教会の管下にあったためであるとされている。つまり、民衆にたいする教会の影響力が比較的弱かった

のである。

トルコの支配下においては、ブルガリア人におけるキリスト教は、他のバルカン諸国民の場合もそうであるが、民族的自覚の象徴であった。修道院はブルガリアの民族文化および文字の守護者の役割を果たした。独立戦争当時、ロシアとの関係が強かった根底には、宗教・文字を同じくしているという連帯感があったことも見のがせない。

ソ連科学アカデミー民族学研究所編のシリーズ『世界の諸民族』における「ブルガリア人」の項は、ブルガリア人の学者によって書かれたものであるが、そこにつぎのような記述が見える。「ブルガリアの農民層にはキリスト教以前の古代信仰の残りかすが長く残っていた。それは他のスラブ諸民族の信仰に似ていたが、しかし独自のなものもあった」。例えば動植物にたいする迷信である。カシの古木は神聖であり、プラタナスは人を守る力、サンザシの木は人に健康と長寿をあたえる力をそなえていた。このことは新年の儀礼に残っている。オオカミにたいする迷信の怖れがあり、「オオカミ祭り」が行なわれた。11月の最初の2-3週間がそれで、この期間、オオカミを怒らせないようにいくつかの禁忌が守られた。「ネズミの日」というのもあり、クマ、キツネ、ヘビにまつわる信仰もあった。

面白いのは、衣服がそれを着用している人の象徴であったことである。女性における肌着と前掛(エプロン)、男性におけるズボンはまじないの対象になり、その持主にまじないの力がおよぶと考えられた。また衣服は持主の身代わりになることもできた。例えば、花婿の出席なしで婚約がなされる場合には、本人の身代

りとして彼のズボンを式場に持参した。

ブルガリア人の古代信仰ではサモウィルイ Самовилы とかサモディウィイ Самодивы とよばれる神話的存在が見られる。また自然を象徴するラミヤЛамия という龍 Дракон もあった。カラコンジョ Караконджо というのは、人間の頭部をもった馬または裸の黒い人間の形をしており、クリスマス前夜からイエス洗礼祭(1月6日)までの間に人間に富をもたらすものであった。

祝祭日の多くは農耕に関連しており、一部には農耕暦とキリスト教祭日とが結びついていた。その一部を紹介してみよう。冬季の祭日は冬至 Коледа が中心であったが、これはスラブ族全体に共通している。クリスマスの祝日はこの冬至祭と結びついたものとされている。クリスマスの前夜にはブルガリアで産するすべての食物を材料としたご馳走がつくられた。祝祭用のパンには、穀物の束や犁をつけたウシ、羊小屋などのある畑の光景などが焼きこまれた。祝祭日の薪はカシまたはナシの木が用いられた。

新年の行事も同じような趣旨で行なわれた。スルワカニヤ Сурвакания という風習は今も残っている。これは若者(今は子ども)たちが飾りたてたサンザシの枝をもって家々をまわり、それで主人たちを軽くたたいた。それは、一家の主人たちがその年健康で幸せであることを願うもので、その代りに子どもたちは主人から贈物ももらった。

2月14日はブドウ祭り Трифон Зарезан で、ブドウ園に出かけて枝を切り、それにブドウ酒をかけて豊作を祈った。参集者にご馳走が出されるのはもちろんである。

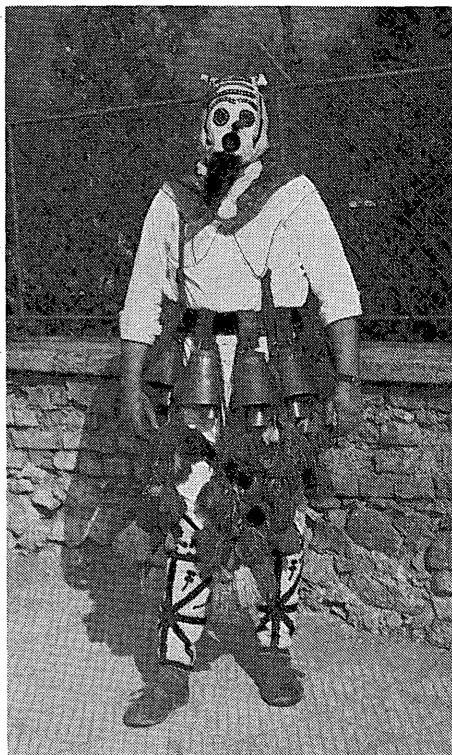


写真5 腰に鈴をつけ、マスクをかぶった
ペロガシュ

旧暦の新年、またはカーニバルの週にはマスクをかぶり、腰に大小の鈴をつけた人々が列をつくって村をねり歩いた。場所によってマスクなどの形は変わったが、これが豊作を祈る祭りであることに変わりなかった。

復活祭の前の週には、婚期に達した晴着の娘たちが頭を羽根や花で飾って、家々を歌ったり踊ったりしながらまわった。これはラザルキ *Лазарки* とよばれ、よい男性にめぐりあい、多くの子どもにめぐまれることを願うためであった。

燃える炭火の上で裸足で踊る祭り *Нестинарство* もあったが、これはスラブ的な起源ではなく、西アジアの一部に

類似の行事が見られるという。

ペペルダ *Пеперуда* とゲルマン *Герман* は代表的な雨乞いの行事である。シャツ1枚だけの少女が家々をまわると、主婦たちは少女の頭に水をそそぎかけた。この儀礼が雨を呼ぶと考えられたのである。これがペペルダであるが、バルカン半島の諸民族や、ルーマニア、モルダビアなどにも見られたという。

ゲルマンというのは、日でりで死んだ若者をかたどる土偶を川岸または十字路に埋葬して雨乞いする祭事である。

6月31日 晴 夕方、雨 この日、たまたま学会でブルガリアにきているモスクワ大学歴史学部民族学教室の主任教授マルコフ *Г. Е. Марков* に会うためソフィア大学を訪れた。マルコフ教授は私のソ連留学の身許引受人である。

ホテル・セルディクから大学までは歩いてもすぐであるが、途中国立の公共図書館があり、その前にキリル文字を発明したキリル・メトディー兄弟の石像が立っている。ブルガリアの人々は、キリル文字の発明者がブルガリア人であることを誇りにし、私は旅行中、「ロシア人に文字をあたえたのはわれわれだ」という言葉を幾人もの人からきいた。

6月1日 晴 早朝の5時55分発の汽車でプロウディフに向かった。ネディさんのご主人（バイオリニスト）が自家用車でホテルから駅まで送ってくれた。この時間、すでに日はのぼり、空気は澄み切っていた。汽車は右手にウィトシャの山なみをながめながら走った。見わたす限り緑の丘陵地帯で、部落は斜面に営まれている。

プロウディフに着いてから、その足で丘の上の旧市街にある民族学博物館を訪

れた。あたりにはジャミヤとよばれるイスラム教会、十字架のついた高い鐘楼のあるキリスト教寺院、ローマ時代に建てられたアーチ型の門などがあって、この都市の古い歴史をしのばせた。この都市は、ブルガリアの先住民であるトラキア人の時代にはじまり、アレクサンダー大王の父フィリップによって占領され、フィリッポポリと称された。ついで、ローマ時代にはトリモンツィウム（3つの丘の意）と改称され、ローマ帝国の東方領域における中心地として栄えた。その後スラブ人、ブルガール人が住みつくが、14世紀中頃から約500年間オスマン・トルコの支配下に入った。スラブからはブルイディン（現在の名称はこれに由来）、トルコ人からはフィリベとよばれ、ほとんどソフィアに劣らない繁栄を示した。

ブルガリアの独立後も、トラキア平野の中心として、農産物の集散、商業の中心として栄えた。とくに定期市はにぎやかであったという。

民族学博物館は古風な石畳の道のをのぼった丘上にあった。建物がまたすばらしく、1847年、建築職人のハジ・ゲオルギという者がプロウディフの豪商コムジオグルの注文に応じて建てた木造二階建てであった。建物そのものがすぐれた文化財であった。

この博物館ではネディさんの友だちである副館長のコレワ Елена Колева さんから案内と説明をうけた。コレワさんはロシア語も自由に話した。私はここで、コレワさんからバラ油の話を書き、深い興味をおぼえた。バラ油用のバラの花はプロウディフから近いカルロボからはじまる「バラの谷」で採取されているので、この日の午後、私たちは汽車でカルロボ

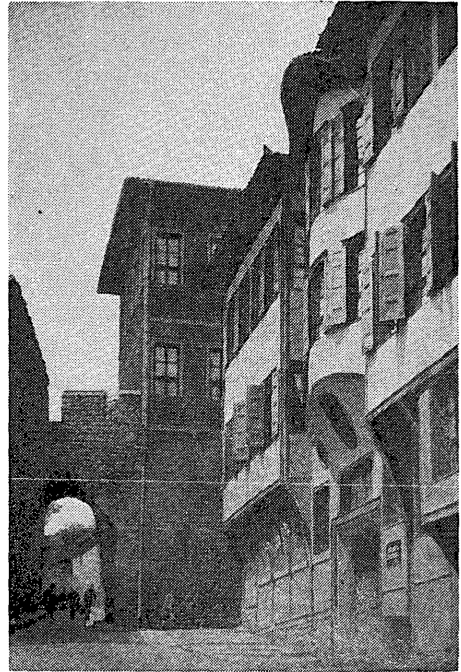


写真6 プロウディフ市内に残るローマ時代の門と19世紀の民家。「エルケル」に注意

のバラ畑を見に出かけた。

〔バラ油の民族学〕

バラ油の原料となるバラの花は、スタラ・プラニナ山地とスレドノ・ゴラ山地の間に位置する「バラの谷」Розовата долина で栽培されている。この谷にはクリスラ、ロジノ、ソポト、カルロボ、カロフェル、カザンリク、シпкаなどの町々が鎖状につながっている。このうちカザンリクは古くからバラ油生産の中心地として知られ、現在は専門の研究所もある。

この地にバラ油を目的とするバラ栽培がはじまったのは17世紀前半といわれ、バラの原種は小アジア方面から移され、ここで品種改良されたのだという。



写真7 ブルガリアにおけるバラの花の採取作業。ハンガリーの旅行家フェリクス・カニシュが19世紀前半に描いたもの

バラの谷の大部分は海拔 700-800 m, 気候および土壌の点でバラ栽培に適している。バラには赤バラと白バラがあるが、赤バラの方がバラ油の含有量が多く、また質もよいとされている。このあたりの花の大きさは、ふつつ 1 kg あたり 200-300の花を数えることで知られるように、それほど大輪ではない。しかし赤バラは反面寒さその他の悪条件に適応しにくいので、場所によって白バラの方を多く栽培している。白バラからのバラ油の欠点は蠟分の多いことである。

カルロポでの私の調査によれば、多くの場合バラ畑の端の方に白バラが植えられてあった。土壌は細石まじりの砂質土で、水はけはよいと思われた。2月末か

ら3月初めにかけて、畑に深さ 50 cm ほどの穴を掘り、バラの枝を切ってさし木する。畝の間隔は 2 m くらい、株と株の間隔は 50-70 cm。ふつつさし木の2-3年後花を咲かすが、ものによっては1年後のこともある。私は花をにやってみたが、なるほど、赤バラが強い芳香を発するのにたいし、白バラはそれほどではなかった。バラの株はふつつ10年くらいでさし換えるとのことであった。

バラの花の採集 Розобер は、開花と同時に、風のない晴れた日の早朝5時頃から10時頃までに行なわれる。花が露にぬれている状態がのぞましい。1926年のデータによると、カザンリクで5月15日から6月20日までの36日間に花が採取された。比較的好条件に恵まれた年の場合、1,800-2,000 kg のバラの花から 1 kg のバラ油が得られるが、雨の少ない暑い年には 1 kg のバラ油のために 4,000 kg の花を必要とする。採花はふつつ若い女性の手でなされ、男は運搬にあたる。「人々は晴着を着、かごを持って畑に向かい、陽気にしゃべったり、歌ったりしながら花をつんだ」。つまれた花は畑あるいは蒸溜工場ですべて選別される。選別は経験に富む年配の女性の手で行なわれるが、この場合バラの花びらの鮮度が基準となった。バラの花に含まれるバラ油の93%は花びらによって占められている。採花の時期には集中的に多くの人手が必要とするので、近郷近在から老若男女が出稼ぎに狩り出された。バラ園の持主はほとんど毎年同じ人々と契約するのがふつつであった。

バラ油は蒸溜によって得られる。まずカザン Казан とよばれる銅製の大きな容器に 10 l の水を入れ、それに1かご



写真8 バラの花の選別。20世紀初頭

(12-13 kg) のバラの花を入れ、さらにバケツに6-7はい (50-60 l) の水を加える。その上に水蒸気を通すための管のついた蓋をかぶせ、布などでよくしぼる。カザンの下で火を焚くと、水蒸気は冷却用の水桶を通過する間に液化し、バラ油を含む液体は管の端末に用意された小容器に受け入れられる。

火はふつう1.5-2時間焚きつづけられるが、その間に2本のびんに液体が得られる。第1のびんはバシュ Баш またはペルワク Първак とよばれ、バラ油を最も多く含有している。第2のびんはアヤク Аяк またはフトラク Вторак とよばれ、第1よりは含有量が少ない。第3のびん以後はバラ水 Розова вода とよば

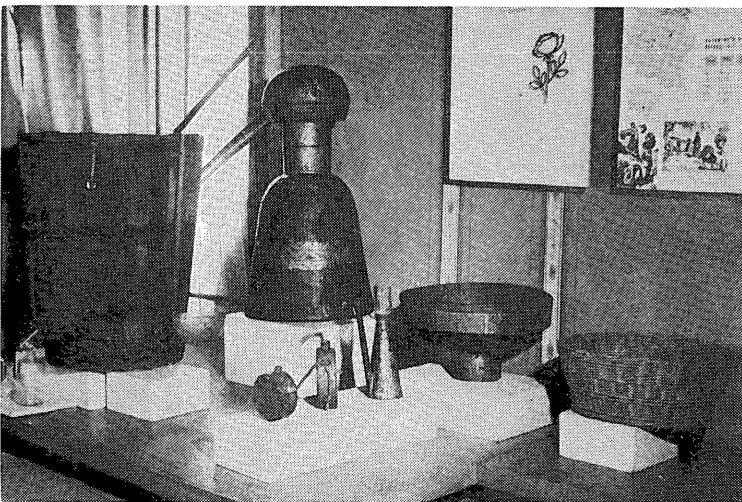


写真9 カザンとバラ油の蒸溜装置。プロウディフ博物館